

国語辞典の積義と用例の検討

柏野和佳子 (国立国語研究所)

1. はじめに

本稿では、人間用、計算機用として「分かりやすい」辞書の構築を目指す立場から、市販の国語辞典の積義と用例とを検討する¹。国語辞典の分かりやすさに特に影響を与えると考えられる、積義の性質、積義の態度を分析する。また、積義の分かりやすさを支える用例のあり方に着目し、用例記述において留意すべき点を考察する。検討材料として、主に、岩波書店『岩波国語辞典』(以降、「岩国」と略す)を用いる。

はじめに、積義の性質を「A. B.」型積義を取り上げて考察する。続いて、辞典間の差異をとらえ、その要因である積義態度の違いを分析する。次に、用例の役割の一つ、文型表示に着目し、その記述を充実させるために、格結合の変化をとらえる必要性があることを、具体例を用いて示す。以上を通し、より望ましい辞書記述のあり方を考察する。

2. 国語辞典の積義の性質

積義には、利用者の良識を期待するような約束事が多くある、という性質がある。それは、読みやすさのための工夫の一つであると思われるが、計算機が辞典の積義をそのまま扱うような場合を想定すると、約束事が分かりにくさの要因となる問題を含んでいる。分かりやすい積義を目指すには、そういった積義の性質がもつ問題を考える必要がある。そこで、「A. B.」型積義における約束事を例に考察する。

以下に、「A. B.」型積義における主なパターンとその例を示す²。AとBをつなぐ関係の明示がない #1～#5が、実際にはどういった関係にあるかを分類して示した。そのうち、#4 は、B 部分が厳密には積義ではなく、事柄を解説した部分である例である。これらの関係理解や、定義と解説の区別は、利用者の判断に委ねられている。

続く#6と#7は「A特にB」の例である。この「A特にB」は、「狭くはB」に当たり、しばしば「多くはA」である、という含みを有する。この「特に」は岩国に限らず、辞典の積義に非常に多用されている。しかしいずれの辞典の《特に》の積義にも、この積義独特の「狭義」を指す用法は記載されていない。これも言わば約束事としての理解が前提となっている記述ということになる。

「また」で連なる

- #1 《お節介》 出しゃばって世話をやくこと。不必要に人の事にたちいること。

「かつ」で連なる

¹ 辞典の見出し語に言及する際は、適宜漢字表記を用いて《 》でくくって表すことにする。

² 積義例はすべて、岩国第6版からの引用による。

- #2 《つち【槌】》 物をたたく道具。柄の先に円筒状の鉄・木などがついている。

- #3 《もずく》 ながまつも科の褐藻類。柔らかく、細い糸状で、ふさのように見える。食用。

- #4 《もち【餅】》 米(もちごめ)を蒸し、ついて作った食品。正月やめでたい時などにつく。

「すなわち」で連なる

- #5 《つっぱる②》 相手に対抗し、自分の意見をあくまで通す。意地を張る。

「特に」で連なる

- #6 《ドル》 アメリカ合衆国・カナダ・オーストラリアなどの通貨の基本単位。特に、米ドル。転じて、お金。

- #7 《来場》 その場所、特にある催しを行う場所に来ること。

一方、「岩波国語辞典タグ付 2004」³は、岩国第5版のデータをもとに、計算機による意味処理のためにGDAという意味タグが付与されたものである。この付与においては、人間の解釈に頼る部分に対しての明示的な細区分が試みられている。たとえば、定義であるか、使用範囲や分野を示す運用的な解説であるか、文法的な解説であるか、といった区別がされている。また、同一語義中で本義と比喩用法とが言及されているような場合、それらが切り分けられている。その結果、意味処理がはるかにしやすい状況が整えられていると言える。しかしながら、細かなタグ付けされたデータを人間がそのまま読むには当然ながら困難が伴う。

人間用にしろ、計算機用にしろ、より分かりやすい積義の記述方法を検討する余地はまだ大きい。辞典編纂に計算機を活用することによって、積義文全体の形式の整合性をはかることなどがたやすくなっている。よって、人間用にもある程度の機械的な統一は試みてよいと考える。また、定義と解説の区別などは、タグを用いずとも記述の工夫で実現できよう。一方、計算機用には、GDAのような試みが有効であるが、それに加え、従来の国語辞典を超えた情報も検討すべきであろう。たとえば、語彙概念構造(LCS)を用いた辞書記述の試みなどが参考になる(竹内孔一・他 2005)。

3. 国語辞典の積義態度

ひとくちに国語辞典といっても、各々には編集者の個性が現れるものである。国語辞典の個性の表れ方の一つを積義態度ととらえ、その積義態度によって辞典間にどのような差異が生まれているかを分析する。その結果、より望ましい積義態度というものを考える。

3.1. 意味・用法認定の問題と積義態度

³ <http://www.gsk.or.jp/doc/TWANAMI2004.pdf> を参照。

積義を巡る問題の中に、意味の違いがどの程度であれば、そこに意味的な境界を認め、多義ととらえるべきかという問題がある。同時に、その境界は、単一語の多義の境界とすべきか、同音異義語の境界とすべきかという問題もある。事実、ある辞典では単一語の多義としてあるものが、別の辞典では同音異義語の語義としてあることも珍しくはない(国広 1997)。山田(2005)は語義の区分の問題に関し、「辞書における意味記述の態度は、中核的意味やさらに抽象的な一般的意味を求めようとするかどうかによって大きく異なる。これらを求めようとする場合には、用法群が少ない数になり、そうでない場合には用法群の数が大きくなる傾向がある。」と述べ、三省堂『新明解国語辞典第6版』(以下、「新明解」と略す)、大修館書店『明鏡国語辞典』(以下、「明鏡」と略す)と岩国との三者間にみられる差異を示している。それによると、たとえば《取る》の意味区分として、新明解は8個の中核的意味をあげ、岩国は7個の中核的意味(各々には3ないし8個の用法群が対応させてある)をあげ、明鏡は中核的意味をたてず、59個の用法群を列挙している、という差が認められると言う。

さらに、「比喩」をどう扱うか、「誤用」や「特例」なのか「新用法のはしり」であるかをどう判断すべきか、という問題もある。倉島(1997)は、辞典編集には「規範的態度」と「記述的態度」とがあり、その重点の置き方や調和のさせ方によって辞典間に差異が生じるものであることを指摘している。

3.2. 岩国を中心とする辞典間にみられる積義態度の差異

岩国の性格は、山田(2005)によれば、中核的意味を求める態度が強く、倉島(1997)によれば、規範的態度に重きを置く辞典であると言えそうである。つまり、積義はできる限り意味がまとめられ、比喩はよほどその用法が独立していると認められない限り本義と同じ意味区分で扱われている。そして、誤用か新用法かの判断は慎重な態度で臨んでいる。

たとえば、先に「A. B.」型の積義で B が狭義の場合に「特に」が用いられていることを取り上げたが、B が広義の場合は、「広く」「更に広く」という語が用いられている。これは一つの意味区分の中で意味の広がりと言及すればこそ出てくる言葉であり、少しの差異でも多義の境界として別に区分すれば、この言葉は実は積義文には出にくいものである。あるいは、拡張した意味に言及しなければ当然出てはこない。ここで岩国と、三省堂『国語辞典第5版』(以下、「三国」と略す)、新明解とをひき比べた結果を示す。

《絵解き》

岩国: ①絵の意味の説明。またはその文言。**更に広く、物事の説明。「一をしてくれ」**②絵で説明を補うこと。

三国: ①絵・の(で補う)意味の説明。②**〔俗〕解説**。

新明解: (一)絵や写真の意味の説明(をする人・文章)。(二)絵でする、説明の補い。

《シナリオ》

岩国: (映画・劇の)場面変化の順序、せりふ・動作などを書いたもの。脚本。「一ライター」。**更に広く、物事の進行について(さまざまな可能性を考えに入れて)仕組んだ筋書き。「政権交替の一」**

三国: ①〔映画のための〕脚本。②〔劇の〕筋書き。③**前もってし組んだ筋書き。「一どおりにはこぶ」**

新明解: (一)映画用の脚本。〔広義では、ラジオ・テレビ用のそれも含む〕(二)劇の筋書き。「**先進国の一〔=思惑〕通りにいくかどうか**」

岩国が一つの意味区分の中で意味の広がりと言及しているのに対し、三国は別に区分している。新明解では《シナリオ》で用例は示しているものの、《絵解き》、《シナリオ》いずれの積義でも拡張した意味に言及はしていない。そのような違いから、辞典ごとに態度の違いがあるらしいことが確認できる。

また、岩国をはじめ、多くの国語辞典は《魅せる》という見出しを採用していない。それは、《魅せる》は「見せる」に「魅する」をかけた所から生じている比喩表現だからである。しかしながら、三国は見出しに立てている。このような点も辞典によって態度が分かれている。

最後に、「誤用か新用法か」の扱いの差をみる。多くの国語辞典が「誤用」を新用法として認定することに慎重な中、たとえば、小学館『新選国語辞典第7版』(以下、「新選」と略す)の《さわり》のように、早くに認定しているものもある。

以下に、岩国と新選の記述を示す。④が「新用法」とされたものである。

《さわり》

岩国: (イ)一曲中で眼目とする、聞かせ所。「一を聞かせる」。転じて、話の聞かせ所。

新選: ②浄りで曲中でいちばんの聞きどころ。転じて、講演などで、聞き手をもっとも感動させるところ。③歌謡曲・ポップスなどで、いちばんの聞かせどころ。④**曲などの出だしの部分**。

〔参考〕④は最近の用法。

以上、岩国を中心に辞典の積義態度によって見出し語や意味区分に差異のあることを確認した。どのような積義態度が望ましいかというのは一概には決めがたい。が、中核的意味を示す一方で、比喩を含めて意味区分が認められるところはできるだけ細分し、かつ、その細分した間にある意味的關係をあわせて記述するといった方法がよいだろうと考える⁴。「新用法」の認定は、現状よりも積極的な認定を行う方向で、今後の各種コーパスの整備にあわせ、客観的に検証できる方法を探っていきたい。

⁴ 名詞の辞書記述について試みたものがある(柏野和佳子・本多啓(1998)“IPAL名詞辞書における多義構造の記述”情報処理学会論文誌, vol.39, No.9, pp.2603-2612)。

4. 文型を表示する役割を担う用例記述

4.1. 用例の役割

森田(1996)によると、用例提示の主な目的には次の4つがある。(1)意味理解の補助、(2)文型の理解、(3)慣用例、典型例の理解、(4)複合語・派生語・関連語等の知識獲得。これに作例でなく実例を加えるならば、その役割として、(5)実使用の証拠の提示、が加わる。分かりやすい辞書記述のためには、それら用例の充実が求められるのは自明なことである。よって、役割ごとに、辞書情報としてあるべき用例記述の検討が必要であるが、以下ではこれらのうち、「(2)文型の理解」の役割を担うものとしての用例記述を充実させることを考える。

4.2. 格結合の変化

文型の記述は計算機用や日本語教育用の辞書において先行しているが、新明解や明鏡など、国語辞典にも文型を記述する試みがみられるようになってきている。また、文型記述をせずとも、岩国をはじめ、自動詞や他動詞であることの表示や、用例による例示によって、格結合の情報を示すということが行われてきた。

ところが、その格結合の認定にも辞典間にゆれが存在し、差異となって現れる。たとえば、自他の認定のゆれは早くから議論されている。たとえば、国語研(1971)で12種の国語辞典を調査したうち、《恋する》は11種で見出し語になっており、うち、岩国(調査時は第2版)をはじめ7つの辞典が他動詞に、1つは自動詞に、そして残りの3つは自他両方あると表示していると報告し、あわせて、他動詞としての用法「を恋する」のほかに、「に恋する」という自動詞としての実例が見つかることを示している。最新版の国語辞典をひきなおすと、新明解や三国は自他両方の表示はあるが、岩国や新選などは依然、他動詞とのみ表示している。2006年2月現在においてWEB上でGoogleで単純に文字列検索したところ、「を恋する」が約37,000件に対し、「に恋する」は実に約669,000件あるという結果が得られた。毎日新聞コーパス⁵では、「を恋する」が19件、「に恋する」が77件あった。これらの結果だけから結論を出すのは早急かもしれないが、「に恋する」という自動詞用法は十分に確立し、むしろそちらの用法が主になってきているのかもしれない。興味深い点は、古語「恋ふ」との比較である。岩国第6版では、《恋う》の項に次の解説がある。

古くは「君に恋ひ」のように「に」を使うのが本則だったのが「を」に移った。意味の重点が、対象に引き付けられることから、対象を心の中で追い求めることに傾いたからと見られる。

古語において自動詞用法から他動詞用法へ一度移った

ものが、長い時をかけ、現代語において再び自動詞用法にもどりつつあるかのようである。

このように、時代の流れの中で結合する格は変化し得る。たとえば、井上(2001)は、本来「～に注意する／～に配慮する／～に協賛する」と言っていたところに、「～を注意する／～を配慮する／～を協賛する」という言い方が生じてきていることを取り上げている⁶。本稿では分析の途上ではあるが、次の4つの格結合の変化について考察する。

- (1)「(〇〇科)に受診する」→「(〇〇科)を受診する」
- (2)「(職場など)を変える」→「(職場など)が変わる」
- (3)「～を心がける」→「～に心がける」
- (4)「～を鑑みる」→「～に鑑みる」→「～を鑑みる」

4.2.1. 「(〇〇科)に受診する」→「(〇〇科)を受診する」

「受診する」はもともと「診察を受ける」という意味の自動詞である。類似したものに「講義を受ける」意の「受講する」や「賞を受ける」意の「受賞する」がある。これらは先にあげた国語研(1971)で取り上げられている。すでに自他両方を示す辞典もあった中、調査時の岩国(第2版)はいずれも自動詞のみ示していた。が、現在の第6版では、前者は「自他」の表示に変わり、後者は「他動詞的にも使う」という注記が記され、変化がとらえられている。類似例である「試験を受ける」意味の「受験する」は、今や他動詞用法のみが表示されている。このように、「受〇スル」の動詞は全体的に自動詞用法から他動詞用法への広がりや移動が認められ、いくつかは辞典にすでに反映されているようである。しかし、「(〇〇科)を受診」は取り上げられていない。毎日新聞コーパスでは「(〇〇科)に受診」はわずか1件であり、「(〇〇科)を受診」は90件と、後者の方がかなり多いという結果が出る。よって、辞典にはまだ反映されていないが、類似語と同様の流れの流れているものととらえられる⁷。

4.2.2. 「(職場など)を変える」→「(職場など)が変わる」

「変える」は他動詞、「変わる」は自動詞である。そこに「～を変える」という言い方が出てきているのはなぜであろうか。この「を」は対象格ではなく、移動を表すものである。「野に行く」の「を」と同じである。よって、動作ではなく、状態の変化のヲ格であり、これは自動詞用法の範囲内のものととらえられる。たとえば、「山を越える」「山を越す」の場合、前者は同じく状態を言っているため、自動詞の用法である⁸。これに対し、後者が他動詞の用法である。つまり、「～が変わる」と同様に「～を変える」も自動詞用法のうちである。しかし、

⁶ 格結合が変化した有名な例として、「～をそむく」→「～にそむく」が紹介されている(信太知子(1981)「～をそむく」から「～にそむく」へ—動作の対象を示す格表示の交替—『国語語彙史の研究 2』和泉書院)。

⁷ 「受験する」は、三国は自他両方、新選は他のみの表示。「(〇〇科)を受診」は、岩国同様に、三国、新選、新明解いずれも反映されていない。

⁸ 「山を越える」は他動詞とする辞典もある。(国広1997)

⁵ 毎日新聞1991年～2004年の全文記事データ集を使用。
<http://www.nichigai.co.jp/sales/mainichi/mainichi-data.html> を参照。

「～が変わる」はこれまで見られなかった用法と思われる。毎日新聞コーパスで検索したところ、職場や病院、学校など、属しているところを変える場合に、「～を変える」でもなく、「～が変わる」でもなく、「～が変わる」を使うことが少なくなることが確認できる。「～を変える」というほど、主体性があるわけでもないが、「～が変わる」というほど主体性がないわけではない、という気持ちから出てきた用法であろうか。

4.2.3. 「～を心がける」→「～に心がける」

「～に心がける」の形は、毎日新聞コーパスでは、最初の1991年からその用例が見つかる。手持ちの雑誌や新書データでも1988年や1989年あたり以降、用例がとれる。それ以前からあったのかどうかは、まだ確認できていないが、少なくとも1988年あたりからは用例が見つかる。たとえば、「運動に心掛ける」「安全運転に心掛ける」「ゴミの減量に心掛ける」などである。このような用例が出てきた要因として次の2点が考えられる。

- ①「心掛ける」を「心を掛ける」と読み直すと、「～を心を掛ける」では「を」が重複するため、それを避ける「～に心を掛ける」の用法が生じた⁹。
- ②「～に注意する(忠告ではなく、「気をつける」の意味)」「～に留意する」に類して「～に心掛ける」の用法が生じた¹⁰。

4.2.4. 「～を鑑みる」→「～に鑑みる」→「～を鑑みる」

ほとんどの辞典は「～に」の用例しか載せていない。毎日新聞コーパスを「鑑み」で検索すると、「～に」が30件、「～を」が1件という結果であった。しかし、先の「恋する」同様にWEB上をGoogleで検索してみると、「～に鑑み」が810,000件、「～を鑑み」は312,000件と表示された。前者が多い点は新聞検索の結果と変わらないが、後者の数は無視できない大きな数である。そもそも「鑑みる」はヲ格をとっていたものである。小学館『日本国語大辞典第2版』にある、時代を少し遡った事例はすべてヲ格の例である。意味的に近い「照らし合わせる」がニ格をとるので、それと同様に、ニ格が主流になったものの、本来のヲ格にもどっているのであるか。実は、岩国には「先例に鑑みて」と「時局を鑑みるに」という、ニ格、ヲ格両方の用例があがっている。このヲ格の用例が、もともとの用法が残る例として採られたものであるか、再び現れた新しい例として採られたものであるかはわからない。が、いずれにしてもヲ格の用例も載せることが必要であると思われる例である。

4.2.5. 用法変化をとらえる辞書記述を目指す

⁹ そうであれば、これは「受診」や「受験」で「診察を受ける」や「試験を受ける」に「を」があるという意識がなくなっていくのと逆行している。

¹⁰ なお、「～を注意する(「気をつける」の意味)」や「～を留意する」も数は少ないが見つかる。「フライパンで焼く時は火加減を注意して焦がさないように」「安全を留意しつつ観測体制を検討する」

以上見てきたような格結合の変化は、意味的な新用法と同様に、国語辞典には十分に反映されにくいものようである。しかしながら、こういった変化を的確にとらえ、丁寧に辞書記述に反映させることは辞書情報の「分かりやすさ」の向上に貢献し得ることである。引き続き、バランスよく種々の資料にあたり、どのような語にどのような格結合の変化が起きているかを広く調査し、辞書記述として取り上げるべき格結合の変化の全体像を明らかにしていく考えている。

5. まとめ

本稿では、国語辞典の分かりやすさに特に影響を与えると考えられる、積義の性質、積義の態度について分析した。また、用例記述においては格結合の変化をとらえる視点が欠かせないことを報告した。

コーパスが整備され、さまざまな意味処理の研究が進捗しつつある現在、新しい積義法や、勘だけに頼らずに用法変化をとらえ、定着度を測るアプローチを確立させることも有効であると考えられる。人間用にも計算機用にもより分かりやすい辞書情報の構築のために今後も検討を続けていきたい。¹¹

謝辞

本稿、特に2章は、岩国編者である水谷静夫氏との議論による。また、4章の考察のきっかけは山田貞雄氏との議論にある。全体をまとめるにあたっては、丸山岳彦氏、間淵洋子氏に有益なコメントを頂いた。ここに記して感謝する。

参考文献

- 井上優(2001)“[問13]時々「～を注意する」という言い方を見聞きするのですが、「～に注意する」が正しい言い方ではないでしょうか。”新「ことば」シリーズ14言葉に関する問答集一よくある「ことば」の質問一、国立国語研究所、pp.36-37。
- 国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店。
- 倉島節尚(1997)“国語辞典の編集”新「ことば」シリーズ5辞書、文化庁、pp.49-62。
- 国立国語研究所(1971)国立国語研究所資料集7『動詞・形容詞問題語用例集』秀英出版。
- 竹内孔一、乾健太郎、藤田篤、竹内奈央、阿部修也(2005)“分類の根拠を明示した動詞語彙概念構造の構築”情報処理学会研究報告、自然言語処理研究会2005-NL-169、pp.123-130。
- 森田良行(1989)“語彙論”国文学解釈と鑑賞、54(1)、pp.46-51。
- 山田進(2005)“辞書の意味記述”レキシコンフォーラム、No.1、ひつじ書房、pp.47-63。

¹¹ 本研究は文部科学省の科研費、若手研究(B)(17720109)の助成を得た。